

令和7年度 第1回

「松本市認知症施策推進協議会議事録」

松本市認知症施策推進協議会事務局

令和7年度 第1回松本市認知症施策推進協議会

次 第

日時 令和7年7月17日(木)

午後1時30分から

場所 松本市役所 議員協議会室

1 開会

2 委嘱状交付

3 あいさつ

4 自己紹介

5 認知症施策推進協議会概要説明 (資料1)

6 役員選出(会長・副会長)

7 会議事項

(1) 報告事項

令和6年度事業報告について (資料2)

(2) 協議事項

松本市認知症施策推進計画(素案)について (資料3)

4 連絡事項

「信州オレンジサミット2025in 松本」開催のお知らせ

・日時:9月27日(土)午後

・場所:ホテルブエナビスタ

・内容:映画「オレンジ・ランプ」の上映

本人やご家族を交えたフォーラム

5 閉会

(1 開会)

事務局 午後1時30分、開会を宣言した委員12名のうち10名の出席があり、協議会設置要綱第6条第2項に基づき、会議は成立した

(2 委嘱状交付)

事務局 構成団体の設置要綱第3条に基づき、委嘱状を机上にて交付

(3 あいさつ)

課長 本協議会は、認知症の方とご家族が、住み慣れた地域で安心して生活を継続できるよう、必要な施策の推進を図ることを目的に設立されており、委員の皆様には、今後2年間にわたり本市の認知症施策推進への協力をお願いしたい。

本年度、「松本市認知症施策推進計画」の策定に取り組む。認知症の方が尊厳を保ち、希望を持って暮らせる共生社会の実現に向け、切れ目のない支援体制の構築を目指し、委員の立場から現場の課題、必要な支援、効果的な取り組みについて忌憚のない意見を頂きたい。

今後関係機関との連携や情報交換を図りつつ、実効性のある施策を展開していく旨を述べた

(4 自己紹介) 出席者による自己紹介が行われた

(5 認知症施策推進協議会概要説明)

事務局 松本市認知症施策推進協議会設置要綱に基づき、本協議会概要について説明

(6 役員選出)

事務局 協議会設置要綱第5条第1項に基づき、委員の互選によるものと説明。
立候補・推薦ともになかったため、事務局案を提示し、委員から承認を得た。

- 会長：小林委員(松本市医師会)
- 副会長：轟委員(松本市歯科医師会)※欠席だが事前に承諾済み

(5 会議事項)

事務局 協議会設置要綱第6条第1項に基づき会長が議長となった

議長 議長は報告事項の説明を求めた

事務局 資料2に基づき令和6年度事業報告について説明した

(意見・質問)

議長 議長は報告事項について、委員から意見・質問を求めた

委員 信州オレンジサミット 2025 in 松本の開催予定について

事務局 信州オレンジサミット 2025in 松本の開催予定

- 日時:2025 年 9 月 27 日(土)午後

- 会場:ホテルブエナビスタ

- 内容:映画「オレンジランプ」上演

認知症本人・家族を交えたフォーラム

本協議会に後援および周知をお願いしたい

委員 認知症初期集中支援チームの対象範囲について

事務局 認知症初期集中支援チームは、対象者が認知症の初期段階であるかどうかに限らず、支援機関が関わり始めたタイミングを「初期」として捉えている。困難事例や対応に課題があるケースなど、チーム相談があった段階で支援を開始している

委員 介入時「通院なし」の方が 4 名とある。認知症の状態(軽度～重度)について把握できている範囲で補足情報を共有いただきたい

事務局 独居で在宅生活を送っている方が多く、日常生活はある程度継続できているものの、生活の中で少しずつ支障が出てきている印象。認知症の進行としては重度というよりも、初期から中期くらいの方が多いように思う

委員 認知症初期集中支援チームの対象者が 15 件、相談件数が 79 件と報告されています。この件数は他市と比較して多いのか少ないのか、また、ケースの掘り起こし状況やチームの対応力についてはどのように評価しているか教えていただきたい

事務局 他市との比較については、現時点で行っておらずお答えできない状況。

委員のご指摘のとおり、当チームは専任 1 名と兼務メンバーで構成されており、十分な対応が難しい面がある。ただし、初期集中支援チームだけではなく、各地域包括支援センターが相談対応や支援を行っている。より専門的な支援が必要なケースを初期集中支援チームに繋ぐ体制。

認知症の方は増える見込みであり、掘り起こしや対応力の強化は今後の課題であると認識している。

委員 年次の対応件数について、具体的に何件くらい対応しているのか教えていただきたい

事務局 概ね毎年 10 件前後の対応件数

(協議事項)

議長 議長は協議事項の説明を求めた

事務局 資料3に基づき、松本市認知症施策推進計画(素案)について説明した

(意見・質問)

議長 議長は協議事項について、委員から意見・質問を求めた

委員 支える側の横のつながりの必要性

・日頃の業務の中で、長年通われている患者さんが「服薬の飲み忘れが増えた」といった変化を感じることがある。そのような場合には、地域包括支援センターに連絡するなど連携している。

・支援者同士の横のつながりも重要だと感じている。薬局と地域包括支援センター、ケアマネジャーなどが顔の見える関係を築いておくことで、相談や連携がしやすくなる。

・コロナ禍以前は、こうした関係性を築く機会もあったが、現在は減少している。今後は、支える側同士がつながる機会を設けることで、情報共有や連携がよりスムーズになるのではないかな。

委員 相談窓口の認知度向上の必要性

・デイサービス利用者は軽度認知症の方が多く、以前よりも増えている印象。

・意思決定支援については、各事業所やケアマネジャー、地域包括支援センターの方々と、連携がとられている。そのため、掘り起こしさえできれば、関わるスタッフが増えてきたと感じている。

・一方で、11 ページにある「認知症に関する相談窓口の認知状況を知らない人が 87.7%」という数値には驚いた。市内で相談窓口の周知活動が行われていたもので、この結果は意外。

委員 認知症の進行状況や年齢等の個別性を重視した対応、心理的バリアへの取り組みの必要性

・認知症の方々の状態像は非常に多様である。初期で活動的な方から寝たきりとなる方まで幅広く、若年性認知症では就労や家族関係の問題が中心となり、高齢者では生命に関わる問題も生じる。進行状況や年齢によって置かれている状況は大きく異なる。個別性を重視した対応が必要である(「100 人いれば 100 人違う」)

・認知症の方々にとっては心理的バリアが特に課題となっている

・本人ミーティングに先日参加されたご家族から、「こうした話をできる場を探していたが、なかなか見つからなかった」との声もあり、日頃の悩みや困りごとを話せる場へつながれるような支援が必要

委員 地域での見守りネットワーク構築の課題

・「新しい認知症観」の考え方は、認知症の有無にかかわらず、支援者としても常に心

に留めている部分。実際には認知症の進行に伴い、在宅での生活継続が難しくなる場面が多く、「どう支えていくか」という課題がある。現在はお近所などの心ある方に支えられているケースが多く、負担が一人に偏ってしまうと、支える側が疲弊してしまうという懸念がある。

・また、地域の方々から火災のリスクを心配する声も多く聞かれ、結果的に施設入所をすすめる流れになることもある。地域全体でどのように支えていけるのか課題であると感じている。

委員 地域での認知症理解促進の必要性

・地域で見守るためのネットワークづくりに取り組んでいる。認知症カフェなどを通じて、ご本人やご家族が一緒に参加しながら、地域の中で認知症への理解や共感を深め、ご本人の意思を尊重しながら、周囲に受け入れてもらえるような場づくりを心がけている。

・また、地域住民に向けた勉強会を通じて、地域全体で認知症を正しく理解し、支える体制づくりを行っていききたい

委員 GPS 機器活用の推奨

・認知症高齢者の行方不明事案と、認知症の方を見かけたという市民からの110番通報の対応が多い。個人的な感覚としては、高齢者人口の増加に伴い、こうした事案も増加傾向にあると感じている。

・GPSなどの位置情報機器の検討・導入について、関係機関の皆様にも積極的に情報提供や啓発をお願いしたい。

委員 認知症への偏見解消と本人発信支援の重要性

・認知症は誰にでも起こりうることであり「お互い様」という気持ちで支えあい、認知症になっても「助けて」と言える社会にしたいと考えている。しかし現実には、認知症への偏見や、周囲に言い出せない状況がある。

・オレンジカフェに参加した本人が「できることはたくさんあるんだよ」と周囲に伝えてくれた。こうした声が一人でも多く増えるよう、啓発活動を進めていきたい。

・引き続き、オレンジカフェ(チームオレンジ)の開催を通じて、地域での理解促進に努めていきたい

委員 地域での自然な見守り体制の構築

・地域で多くの方と関わる中で、差別的な発言を耳にすることもあり、まだまだ地域での認知症への理解は進んでいないように感じる。認知症サポーター養成講座などの企画を提案しても、「人が集まるのか」「自分には関係ない」といった反応が多く、実施には工夫が必要。

・一方で、道に迷っている近所の方に自然に声をかけたりする姿も見られる。こうした理解ある人たちが地域に増えていけば、誰もが住みやすいまちに近づくのではないかな。

・福祉ひろばは「誰でも来られる場所」として開かれており、認知症であってもそうでなくとも、自然に集い合える場になっている。こうした“宣言のいらない共生の場”がもっと地域に増えていくことが大切だと思う。

委員 MCI(軽度認知障害)の段階からの理解促進の必要性
・認知症が進行した段階で来院されるケースが多い。この時点での治療介入は効果が限定的で、地域生活の継続が困難なケースも少なくない。
・MCI(軽度認知障害)の段階からの理解と対応が、認知症そのものに対する過度な恐れや偏見を和らげるのではと感じている。

委員 地域包括ケアの実現、多職種の連携や顔の見える関係性の再構築の必要性
・認知症に限らず、さまざまな課題を抱えながらも、誰もが地域の中で多様な形で暮らし続けられることが「地域包括ケア」の本質。その実現には、医療・介護など多職種間の連携や、顔の見える関係づくりが欠かせない。
・松本市が中核市になり体制変化とコロナ禍で連携が弱まった中、医師会主導で多職種連携の「地域包括ケア研究会」を立ち上げ、関係づくりを再構築していく取り組みをすすめている

オブザーバー 本人ミーティング等の周知強化の必要性
・本人ミーティングが十分に周知されておらず、ご本人やご家族が相談先を見つけづらい状況にある。本人ミーティングに参加することで、認知症の本人だけでなく、ご家族の方の繋がりも生まれる。
・多くのご家族は介護の大変さをどこに相談すればよいかわからず、一人で抱え込んでしまいがち。参加により、包括支援センターなど他の支援機関との繋がりが生まれ、家族同士の情報共有や支え合いにもつながる場となっている。
・こうした意義を踏まえ、本人ミーティングの啓発をさらに推進していきたい。

オブザーバー 周囲の理解と本人のやりがいや居場所ができる大切さ
・どこに行っても「本人主体」で過ごしており、同じ話をしても周囲が理解してくれていると感じている。私は「主人がちょっとおかしいかな」と思うこともあり、それを言わないと自分だけで抱え込んでしまうため、伝えている。
・地域の活動には、「主人のことを少しでも知ってもらえれば」との思いで参加している。福祉ひろばでは、主人が椅子を並べるなど積極的に動く姿があり、本人にとって“やりがい”や“居場所”の大切さを実感している。

議長 課長にまとめとして、意見を求めた。

課長 提示した素案の基本方向性については異論がなかったようですので、現時点ではこの方向で進めていきたい。皆様からいただいた具体的なご意見やアイデアをさらに盛り込

み、より実効性のある計画となるよう引き続き検討を重ねていく。
今後とも皆様のご協力をよろしくお願いしたい。

委員 委員から意見

- ・「早期の気づきと対応」の項目について、「予防」という言葉の使い方に懸念がある。この表現自体は否定しないが、「予防しなければならない」という圧力や、予防できなかった場合の自己責任論につながりかねない。
- ・予防を強調するよりも、「備え」の重要性を訴えるべきではないか。
- ・自分が認知症になったときに、いかに周囲に助けを求められるかが重要。この背景には、認知症に対する偏見やスティグマの根強さがある。
- ・松本市には、認知症への偏見解消に向けて、明確な姿勢を打ち出してほしい。

議長 協議事項について協議会として了承し、議事を終了した

(4 連絡事項等)

事務局 信州オレンジサミット 2025in 松本の開催予定の案内

(5 閉会)

事務局 閉会を宣言し、午後2時50分散会した